指揮官が鎮守府に着任しました。

Minatoneko

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深海悽艦との開戦より数年。

日本政府は膠着した戦線を打破するため他国との積極的な連携に取り組み始める。

様々な思惑の絡み合うなか、１人の指揮官が寂れた鎮守府に着任する。それは欧州の大陸で深海悽艦とは違うモノとの戦いで圧倒的戦果を挙げ「欧州戦線の英雄」と謳われた主人公だった。

みたいな話を書いていきたいと思っています。

目　次

指揮官が鎮守府に着任しました。Ⅰ　1
指揮官が鎮守府に着任しました。Ⅱ　26

指揮官が鎮守府に着任しました。Ⅰ

ＳＳ投稿は初です。
ご指導ご鞭撻よろしくです（不知火並感
誤字などのご指摘も宜しくお願い致します。
筆者は広く浅くをモットーに生きておりますのであらゆる知識が中途半端であり、詳しい方々からすると「そんなわけねーだろ」という描写もあるかもしれません。またかなりの遅筆です。ですが頑張って書き上げていきたいと思います。
ご理解とご指導を再度お願い致しまして、本文へと入りたいと思います。
それでは。

男は溜め息混じりに紫煙を吐き出した。反対に息を吸い込んでみれば、未だに馴れないなんとも言えない臭いが鼻につく。
湿っていて、生臭い、何とも言えない臭い。知っている。これは、潮風だ。
男は自分の状況を思い出して、また溜め息を吐きそうになったが、かろうじて堪えた。

「…そろそろ行くか。ここでこうしてたってしょうがねぇしな…」
鈍い銀色の輝きを放つ、研ぎ澄まされた刃のようなフォルムの車。わざわざあの手この手で用意した相棒である。
乗り込んでエンジンをかけ、アクセルを吹かす。走っている車は男のものだけで、海沿いを走る車道には人っ子一人いない。
「ん…悪くねぇな、海沿いってのも。人もいねぇし」
先ほどまで矢鱈と溜め息を繰り返していたのを忘れたように、男は機嫌良さげに呟く。
誰もいないのをいいことに、アクセルを踏み込む。
狼の遠吠えにも似たエンジン音が人気のない街に響き渡る。
男が目的地に着くまで、あと小一時間。

「ｈｅｙ，大淀ォー？新しい司令官って今日来るんでしたヨネー？」
「えぇ、司令部からはそう聞いてますが…遅いですね…」
部屋に二人分の溜め息が空虚に響く。どちらも眼を見張るような美女なのだが、纏う雰囲気は暗く、また大淀と呼ばれた女性の目の下には、疲労故かクマが出来ている。

「呼んだクマ？」（。・ｘ・）ゞ
「呼んでませんから部屋で待機しててください」

「…金剛さん…私たち、どうなるんでしょうね」
「……わからないネー…」
謎の闖入者によって僅かに軽くなった空気が、またどんよりと暗く重いものになっていく。
二人が男に出会うまで、あと小一時間。

「――――？」
金剛は俯き加減だった顔をあげる。その聴覚が、徐々に近付いてくる音を捉えたからだ。
「どうしたんですか？」
「…なにか近付いてくるネー…多分車だけど、聴いたことないエンジン音ネー」
「新しい司令官でしょうか、私ちょっと見てきますね」

「ｙｅａｈ，あと５分もしたら見えてくると思うヨー」
「わかりました！」

「…ここか……」
　車から降りた男の前には３ｍ程の高さの塀と、鋼鉄製の門が聳え立っていた。門扉には《日本海軍　第十七鎮守府》という看板と、《関係者以外ノ立チ入リヲ禁ズ》という看板が掲げられている。
「まいったな…守衛くらいいると思ったんだが…インターホンすら見当たらねぇ」
　煙草を咥えライターで火をつけながら、男はこれからどうするか考える。考えなしにここまで来た為、事前に待ち合わせている訳でもなく、今日自分がここに来ることすらこの中にいる者たちは知らないかもしれない。
「さてはて…まぁなんとかなるだろ。塀も３ｍくらいしかないし、いざとなったら大声で叫んでりゃ誰か来るだろ」
　吸いさしを携帯灰皿にねじこみながら、男はこの場に来るに至った経緯を少しの苦々しさと共に思い返していた。

時は半月ほど遡る。

「――――は?…もう一度言っていただけますか?無線の調子が悪いようでして」

『おやおや、君がジョークを言うとは珍しい』

余談ではあるが無線の調子が悪い、などという言葉は死語となって久しい。通信技術の飛躍的な進歩は、地球の反対側とでもタイムラグ無しの通信を可能とした。

「冗談を言った覚えはありませんが。…一体どういう訳です?日本へ行って海軍の指揮官になれ、などと」

『指揮官ではなく司令官だよ、司令官。日本軍が生み出した”カンムス”、そいつらを率いて海からやってくる化けモノと戦うのさ』

「……」

『なに、話としてはシンプルさ。君も知っているだろう?”カンムス”は戦艦の”魂を宿したヒトガタ”だ。戦艦1隻にから造れる”カンムス”には限度がある』

「それは聞いた事がありますが…あぁ、それで海外の艦に目をつけたという訳ですか」

『そうそう。…で、我らが欧州連邦としても日本からの支援は喉から手が出るほど欲しい。ここに我ら手を繋ぎ、って訳だ』

「それと自分が日本に行く事とはどう繋がるんですか？」

『うんうん。君も日本の、いや、海に面した地域の状況は知っているだろう？』

――――知っている。自分はそこにはいなかったが、それでもそこは…故郷、だったのだから。

今から5年前、日本は突如として海から襲撃を受けた。既存の兵器が通用せず、海上でありながら極めて有機的に戦闘を行う異形の存在。

海に面する地域全てが同時多発的に攻撃を受け、その全てが為すすべなく火の海に沈んだ。

それは日本以外の国も同様だった。

人々を内地へ逃がす時間を稼ぐ為だけの絶死の戦いがあらゆるところで繰り広げられた。

最初の会敵より三日で日本は制海権も制空権も喪失した。避難しようとする旅客機や漁船にすら容赦なく攻撃が加えられた。

最初の一週間が過ぎる頃には誰もが理解していた。これはどこか他国からの攻撃などではないことを。

交渉の余地も降伏の意味もなく、ましてや逃げ場などどこにもないということを。

人々はやがて海より来たる異形の存在を〝深海棲艦〟と呼ぶようになった。

数えきれない程の戦死者を積み重ねて、深海棲艦が陸上ではその能力を大きく減衰させる事を突き止めた日本はギリギリのところで滅亡を免れたが、状況は最悪と言ってよかった。

なにしろ四方を敵に囲まれているのだ。このままではただ死ぬのを先延ばしにしただけである。

――だが。それは奇跡か、それとも必然か。日本の海上自衛隊技術研究所は〝それ〟を生み出した。深海棲艦と同様海上を征く能力と、深海棲艦の装甲を撃ち抜くだけの

攻撃力を兼ね備えた人類最後の希望。
その名こそ、〝艦娘〟。
『……と、まぁ君も知っての通り日本は艦娘を生み出す事でなんとか戦線を押し戻す事に成功した訳だ。そして海岸線に沿って防衛線を構築し、鎮守府とかいう軍基地に艦娘を配備してこれを守っている』
「……」
『だが、日本海軍は人手不足らしくてね、部隊を率いて前線を戦える司令官を欲しているとのことだ』
「それでわざわざ自分を指名してきたんですか？」
『君を指名したのは連邦政府さ。日本は欧州艦と有能な司令官が欲しい、欧州は日本の支援とー』
「…欧州艦由来の艦娘が欲しい、と」

『より正確には充分な経験を積んだ即戦力としての、という事だね。それに君を取り返せば”司令官”も手に入る、という算段さ。運用のノウハウやら設備が無い現状、艦娘だけ貰っても意味がない』

「…日本政府が一度手にした艦娘を容易く他国へ返すとは考えにくいのですが」

『そうかもしれないね。だが、国と国の約束だ。日本だって欧州連邦と表立ってやりあうわけにはいかんだろうさ。君が部隊を率いて彼らの指定した海域を深海棲艦から取り戻せば契約は完了だ。君は大手を振って帰ってこられる』

『それに、”彼女たち”をより強化する為にも日本の技術供与は見逃せないのさ、連邦も、本社の技術者も』

「しかし、まだ”連中”を根絶やしにした訳では…」

『君の言いたいことはよく分かるよ。だがこれは欧州連邦政府から本社を通した正式な

命令だ。拒否など許されない。一週間以内に荷物をまとめたまえ』

「…………了解です」

『欧州戦線の英雄を市場に送り出す様で心苦しいが、これもこの国に住まう人々の為だ。その代わりと言ってはなんだが、出来る限りの便宜を図らせてもらった。日本での君の生活や立場は連邦政府が支援する。…ここと君の部下は私が守る、思い切りやって来い、黒琉瑠貴亜中佐』

「了解」

――――――――――――――――――

それから瑠貴亜は荷物をまとめ、方々に挨拶し、列車やら飛行機やら船やらを乗り継ぎ、やっとこさ極東までやって来たのだった。

遠い。ものすごく遠い。

いつ襲われるかわからない中での長旅とかふざけんな。

「…とは言ったものの…どうすっかな…なーんか海軍司令部も微妙な顔してたしな…うぅぅむむむ」

「あ、あの……」

「あん？」

「…っ！」

振り返るとそこには声にならない悲鳴を上げつつ此方を見上げる女性がいた。長い黒髪と理知的な眼鏡が特徴的な美女だが、その顔は真っ青である。

…言うまでもなく、自分のせいであった。

「…あ～すまん、俺は黒琉瑠貴亜《こくりゅう　るきあ》という。怪しいモンじゃなく、本日付でこの海軍基地の司令として着任する予定の者なんだが…聞いて、ないか…？」

「いっ、いえ！伺っております！もっ申し訳ありません、私は軽巡洋艦、大淀と申します！司令補佐艦として、お迎えに参りました！」

「お、おう…ありがとな…じゃあとりあえず、中に入れてもらっていいか？」

「えっ…鎮守府内に、ですかっ？」

「…？…あぁ、司令部からは基地にて前線指揮を取れ、って言われてるからな…なにか入ったらマズイ事情でもあんのか？」

「いっいえ！そんなことはっ」

真っ青だった顔色は幾分和らいだものの、矢鱈とオドオドとした様子の大淀に対して瑠貴亜はどうしたものかと頭を巡らせる。

今までも目の前の大淀の様な部下はいた。こう言った場合、焦って距離を詰めようとすればお互いにとって良くない事になる。

結局瑠貴亜は、この場で大淀をどうこうする事を諦め、ギクシャクと目の前を歩き始めた大淀の後に着いて行く事にした。

「…こちらが提督が指揮をお取りになる、”執務室”です。奥の扉は提督のお部屋に繋がっています」

「へぇ…なかなか豪勢な部屋だな」

大淀は瑠貴亜を案内しながら、身体の震えを抑えるのに必死だった。
極度の疲労に加えて、この新しい司令官に対する恐怖が彼女の精神を激しく圧迫していた。

――――よみがえるのは、過去の記憶。

「何故だっ！何故こんな簡単な作戦も満足に遂行出来んのだっ!?」

「ひっ!?」

初めて配属された鎮守府の司令官は、瞬間湯沸し器のような人だった。戦況を把握す

る才も、部下である艦娘の意見を聞く度量もない人だった。
結果として作戦は何一つうまくゆかず、仲間は傷付いていくだけだった。司令官からの八つ当たりで、大淀の顔にはいつも痣と隈が絶えなかった。

やがてその司令官は資金の横領が発覚し、更迭された。
鎮守府は解体され、大淀は金剛らと共に別の鎮守府へと配属された。

そこに、「司令官」はいなかった。
『聞こえるか、艦娘ども。今日は鎮守府近海より更に沖へと出る。索敵した後敵がいれば撃て、以上』
「…了解。通信、終わり」

配属されたのは最前線の鎮守府だった。
『こんな危ない所にいられるか、闘いなんぞ貴様らでやれ』
そう言って司令官は、無線機をひとつ置いていなくなった。
指示は無線機を通じて2、3日に1回。

鎮守府近海を周回して、本隊からはぐれたであろう深海悽艦を倒すのみ。
それでも大淀にとっては、誰に怒鳴られることも殴られることもない、穏やかな日々だった。

どうせなら。ずっとこのままで。…そんなことを考えた罰だったのだろうか。

”ソレ”は唐突にやって来た。
数十を超える深海悽艦とそれを率いる戦艦クラスとおぼしき人型深海悽艦。一般的に深海棲艦はヒト型に近づくほど強力なものであり、時にはユニーク個体といえるものも存在しているらしいが、彼女たちが人型の深海棲艦と会敵するのはこれが初めてだった。
近海の索敵しかしていなかった為にその準備行動に気付かず、完全に先手を取られてしまった。
「司令、敵が、敵の大部隊がっ」
「既に近海付近まで入り込まれています！指示をっ！」

「しれい、かん…？」

どれほど呼び掛けても、返事はなかった。

司令官の指揮が無ければ艦娘はその能力を十分に発揮することは出来ない。

強大な敵の前に一人、また一人と倒れていった。

地獄を這いずるような闘いを何日続けただろうか。たった半日のようにも、何日にも感じられるような、辛い戦闘だった。

敵は物資が尽きたのか、唐突に引き揚げていった。

水平線に太陽が沈む頃、最も近くの鎮守府から艦娘達が駆けつけて来てくれた。

なんでも、私達の無線を偶然拾ってくれたらしい。

……そうか。無線が通じてなかった訳じゃ、なかったんですね。

大淀は覚った。司令官は私達を見捨てたのだ、と。

二十人ほどいた筈の艦娘のうち生き残ったのは大淀を含めて僅か６名。鎮守府は壊滅と判断され、解体。

生き残った艦娘は皆酷いＰＴＳＤで戦場に戻るどころではなかった。

「…金剛さん。金剛さんは、まだ闘い続けるんですか？」

「モチロン」

「…どうして、ですか？あんな、あんな目にあったのに！」

最後の最後まで敵の前に立ちはだかり、幼い駆逐艦たちを庇った金剛は、他の誰よりもひどい怪我をしていたのに。

―なのに。なぜ、なのだろう。

「ｈｅｙ，大淀ォー？…こっち向くネー」

「…？」

「確かに、私たちはテイトクに恵まれないデース。…次のテイトクも同じような人かも

知れませン」

「でも、たとえどんなテイトクであっても」

「ワタシは」

「金剛型戦艦1番艦、金剛デース！」

「かつての大戦の時から、姿かたちは変わっても、変わらないものがありマス」

「ワタシは、〝金剛〟は、人々を守る為に闘いマース！」

眩しかった。金剛さんのその笑顔は。

痛々しい大怪我で包帯まみれにも関わらず、太陽のような輝きを放っていた。

結局、大淀は金剛と共に新たな鎮守府に配属される道を選んだ。

退役する事も出来たが、どうせ自由な人生が待っている訳でもない。

人をはるかに上回る能力を持った存在を首輪もリードもなしに解き放つ程、総司令部は愚かではないだろう。
きっと監視が付いたり、何につけ不自由が付いてまわるのだろう。
だったら。

最後まで戦ってやろう。

そう思って着任した鎮守府にはそもそも司令官がいなかった。
大淀は落胆を隠せなかったが、僻地で深海悽艦の襲撃もほとんど無い地域ゆえに、それも仕方なかった。
きっともう、司令官になって最前線で戦う気概のある武人など、この戦争の初めに皆逝ってしまったのだろう。
内地では戦前とそう変わらない生活を取り戻しつつあると、ニュースキャスターが嬉しそうに語っていた。
そんな場所を捨てて、こんな最前線まで来るような物好き、マトモな人ではないだろう。
きっと私達艦娘を憂さ晴らしの道具か、せいぜい出世の道具くらいにしか思っていな

い、そんな人だ。

―そう、思っていたから。

…怖かった。大淀は目の前の男が、怖くて仕方なかった。

艦娘は提督による指揮が無ければ本来の性能を発揮できない。

司令官のいない現状は、決して望ましい状況ではない。

だが、これからこの司令官と共に生活を送らなければならないという事実が、大淀にとっては戦いの果てに沈む事より恐ろしかった。

どうせなら最期まで戦ってやろう、と決めた筈の覚悟が、真夏の氷のように溶けていく。

「…あー、大淀。俺は荷物とか開けて整理するから、今日はもういいぞ」

「…はい……」

「…俺の正式な着任は明日だから、明朝０７００に皆を集めてくれるかな、挨拶したいし」

「わかりました…」

大淀が部屋を出ていくのを見届けた後、俺は思わず溜め息を吐いてしまっていた。

「…いやー…なんであんなビクついてんだ……」

張り詰めて今にも切れそうな、そんな様子で。

あまりにも、痛々しかった。

――コンコン。

「スミマセーン。誰かいますカー？」

「鍵はかかっていない、入ってくれ」

「失礼しマース。…あなたが新しいテイトクですカー？」

「あぁ。…本日付、というか正確には明日から、この前線基地の指揮官として着任する、瑠貴亜…黒琉　瑠貴亜だ。階級は中佐」

「英国で生まれた、帰国子女の金剛デース！よろしくおねがいしマース！」

「あっあぁ、よろしく……ん？帰国子女っつった？」

「イエース！”金剛”は英国ヴィッカースで建造されたネー」

「あぁ…それで帰国子女ね……んで？なにか用があったんだろ？」

「新しいテートクに挨拶しないとって思ってネー！」

「…それだけ？」

「イエース！でも、優しそうなテートクで良かったデース！」

「そりゃ良かった。…さっき大淀にも伝えたけど、明日０７００に挨拶の場を設けたい。それまでは俺に気にせず、全員休んでくれ」

「お休みは嬉しいネー！…でも、近海警備はしないといけないヨー？」

「一応聞くけど、君ら艦娘の言う近海ってどのくらいの範囲？まさか本当にニューギニアまで？」

「そんな訳ないネー！各鎮守府の制海圏の内、ゼッタイ安心、っていう範囲の〝外側〟を近海って呼んでイマース。だから鎮守府によって近海の範囲は違うケド、ここでは２０浬から２５浬くらいデース」

「２５浬っつーと…４５０００くらいか。それくらいなら大丈夫だ」

「…？」

「まぁそれはこっちでなんとかする。…気にせず休め、こんなこと言うのもなんだが、すごい顔だぞ。寝ろ」

「…よくわからないケド…わかったネー！」

「いい返事だ。俺はこの鎮守府の周りを見てくる。明日、全員に挨拶したあと、鎮守府内をチェックするから、なんかあったらその時に聞こう」

瑠貴亜は？マークを浮かべる金剛を部屋から送り出すと、運び入れた荷物の中からテキパキと小物を出しては執務室や隣接する私室を自分好みの空間へと整えていった。

「壁紙やらカーテンやらも替えたいところだな…椅子も見てくれればっかで仕事しにくそうだし。…こんなもんか」

満足げに部屋を見渡し、瑠貴亜はポケットをまさぐる。煙草にライターで火をつけながら、一際大きく、見るからに頑丈そうなコンテナの封を解いていく。

その中には様々な銃火器、日本刀、野戦服やボディアーマーといった装備がぎっしり詰め込まれていた。

「ん。特に欠品は無いし、目立った破損もなし。んじゃ行きますか」

瑠貴亜は着ていた服を脱ぐと濃紺の戦闘服を身に着け、ベストやポーチといった装備品を装着していく。

最後に分解された状態でしまわれていた拳銃を組み直し、動作確認をしてから腰の右後ろへとしまった。

「んじゃ、ちょっくらご挨拶に行きますかね。お引越しの、さ」

指揮官が鎮守府に着任しました。Ⅱ

”ソレ”はずっと退屈だった。

生まれ落ちたときから”ソレ”は強者だった。

それ故だろうか、周りにいた連中ほどには正気を失ってはいなかったように思う。

そう。まさに、”正気の沙汰ではなかった”のだ、自分の周囲のなにもかもが。

ただただ破壊の限りを尽くし、動くものすべてを動かなくなるまで攻撃する。

逃げ惑う者も、泣いて命乞いをする者も。

最早物言わぬ死体となった兵士の体を、それでもなお原型を留めぬまでに破壊し尽くす”バケモノ”ども。

恐ろしさなど感じぬ身にあってなお、背中が粟立つような、その凄惨さ。

言い知れぬ不快感に押されるようにして、海の上を進んだ。

見下ろしても、見上げても、目に映るすべてが真っ赤だった。

時たま生き残りの人間が攻撃を仕掛けてきたが、豆鉄砲にすら劣るような攻撃に、苛

立ちすら浮かばなかった。

『ツマラヌ…』

どれ程の月日、彷徨い歩いただろうか。時に人間だけではなく異形のバケモノからも攻撃されたが、それらバケモノでさえ、脅威とはならなかった。

基本的には無視。どうしてもうっとおしければ死なない程度に痛めつけ、逃げるならそれに任せる。

バケモノどもは大抵逃げることもせず纏わりついてきたので、随分沈めたが……

気が付けば、今いる海域に辿り着いていた。

人間はおろか、バケモノどもすら殆どいない、静かな海。

『シズカ…ナ……ウミ…ワルクハナイワネ…』

何事も起こらない、穏やかな時間。戦火から遠く離れるとより実感できる。

”あの場所はなにかおかしかった”と。

それを実感した途端、急に頭の中がクリアになっていく。まるで水平線に日が昇るよ

うに。朝靄が晴れるように。

『ソウ…ダッタワネ……ワタシハ…ワタシタチハ…』

―かつて彼女は英雄だった。

誰もが憧れ、敵でさえ敬意と畏怖を覚えずにはいられない、世界でたった7人しかいない英雄。

キラキラした眼で自らを見上げる小さな子供の眼差し。

頼もしい、猛者と呼ぶにふさわしい仲間達。

自らに寄せられる、信仰とさえ言えるほどの信頼と期待。

誇らしかった。そして、自らがこれから赴くであろう戦場に想いを馳せた。

戦場に絶対はない。戦いの果てに傷つき斃れることもあるだろう。しかしそれでも、”そう在れる”ことが喜びだった。

だというのに。

ある時祖国は自らより遥かに強大な国と戦争を始めた。

勢い込んで始めた戦争であったが、徐々に戦況は苦しいものへと変わっていった。
自分も方々駆けずり回る毎日だったが、ある種充実した日々だった。

―だが。ある時を境に、出撃を命じられることが減っていった。無論戦局が良かったからではない。
他の仲間たちが最前線で傷つきながら戦う間、自分はただ待つだけだった。
戦友たちが、一人、また一人と減っていくなか、遂に自分は、戦場へと向かう手段さえ奪われた。
疲弊し、傷つき、それでもなお国のために決死の覚悟を漲らせて出立する仲間たちを、ただ見送るだけの日々。
しばらくして、戦争は終わった。祖国の圧倒的な敗北というかたちで。
仮に自分が最前線にいたところで、結果は変わらなかっただろう。
それでも、胸に空虚な風が吹き抜けるような気持ちが晴れることは無かった。

”死に損なった”
”わたしも戦場で果てたかった”
”戦うための存在なのに、戦うすべを失った挙句、戦いが終わってしまった”

”自分より弱く、小さな者たちでさえ戦い抜いたというのに、自分はなにをしているのか”

意味がないとわかっていてもそんな思いで頭の中はいっぱいだった。

戦後の処理が進み、本当の意味で戦争が終わった後、元敵国の兵士たちによって自分は海の上へと連れてこられた。

さて。これからなにが起きるのだろうか。そんなことをぼんやりと考えていた、その時。

焼け付くような、猛烈な熱と凄まじい爆風が辺り一面を薙ぎ払った。

巻き上げられた水蒸気や荒れ狂う水面によって周囲の状況は全く掴めなかったが、これまでの経験から大凡の予想はついた。

おそらく上空、それも至近での爆発。…しかし。なんなのだ、この威力は。

そして思い出す。つい最近、祖国を二度にわたって焼き払ったという、敵国の恐るべき新兵器を。

都市ひとつ丸ごと、数十万はいたであろう人々ごと焼き払った、「祖国」と「かの国」の力の差を表したかのようなその兵器が。今や我々の上に落とされたのだと、明確に理

解した。

だが解せなかった。なぜなら、周囲には”その国の者たちもいたのだから”。

敵だった自分を攻撃するのならば理解できる。嬲るなら嬲ればいい。

だが。熱と爆風に晒され、苦痛のあまり叫び声をあげている者の大半は、つい先日まで自分たちと死闘を繰り広げた、相手方の者たちだった。

激しい痛みにうめき声をあげながら、少しだけ見えてきた爆心方向に目を向けると、そこには

見知った顔があった。

「酒匂っ！おいっ酒匂!!返事をしろ！酒匂！」

爆発の直下にいたのであろう、総身を炎上させ、ぼろぼろの酒匂。かつて肩を並べて戦った戦友の、末妹。

「あ〟あ〟あ〟あああああっっ!!」

彼女のもとへ駆けつけたかった。だが僅かも動くことができなかった。

すでに意識を失い、ピクリとも動かない彼女の姿を、ただ見ているしかできなかった。食いしばった奥歯が砕ける音がした。視界は真っ赤だった。自分の怪我も軽くはなかった。

だがそのどれも、どうでもよかった。

―わかっている。自分たちをここまで連れてきた連中が何を企んでいるのか、もうわかっている。

あの新兵器とやらの威力を、知りたかったのだ。そんな。実験なんかのために。酒匂も。私も。祖国のために戦ったであろう大勢の”元敵たち”も。

腹の底、心の奥底から、怒りと憎しみが湧いてくる。

「…戦いのために産み落とし…その果てがこれか」

「名誉も！誇りも！なにもかも踏みにじってっ！…ただ沈ませるためだけに沈めるのか！」

恐怖。絶望。怒り。諦念。

ありとあらゆる負の感情が。海上に巻き起こったキノコ雲のように渦巻いていく。

爆発をかろうじて耐えた者たちが皆、絶望に俯いている。
辺りに満ちる怨嗟の声。苦痛に呻き、助けを、家族を呼ぶその声に、ただ手を差し伸べることさえできぬその無力に。

—絶望していた。

それからのことはあまり記憶にない。
ゆっくり、本当にゆっくりと酒匂が息を引き取り、海に沈んでいくのを見つめ続け…同じ爆弾が、1度目より至近距離で爆発したのを感じたが…自分も意識を失ったのだろう。

この赤い海がなんなのか、それはわからない。あの時沈んだはずの自分が、なぜこんな風にしているのかもわからない。記憶にある自分の姿と比べて、今の姿はあまり似ていないようにも思える。
あの、なにもかもが狂った戦場に目覚めてから数年。

自分はいったい何者なのか。この世界はいったいなんなのか。あのバケモノどもはなんなのか。

気になりはしたが、どうでもよかった。……ただ、疲れていたから。

静かなところで、ゆっくりと考え事がしたかったし、無力な人々を一方的に虐殺するのは気が進まなかったから。

この数年、考えることはいくらでもあった。きっとあの最期の瞬間に抱いた憎しみと怒りが自分をこのような姿に変えたのだろう。だが、その憎しみももう、生まれ変わった直後の地獄を思い返せば薄まってしまう。

確かに憎かった。あのような最期は、決して本意ではなかったから。

悔しかった。最後まで戦場に立つことができなかったこと。戦友を見送ることしかできなかったこと。

惨めだった。生き残ったのに、あんな仕方で沈むしかなかったこと。あの子をただ見ていることしかできなかったこと。

でも。それでも。

「ワタシ…ハ…」

無辜の人々を守り、己が力で未来を切り開くこそが我が本懐。
例え憎しみゆえにこのような姿と成り果てようと、魂まで売り渡してしまいたくなかった。
逃げ惑う人々に襲い掛かるようなマネは、したくなかった。
このまま。穏やかに。

「…な、なんですか、あれは…っ全艦！砲雷戦！用意！」

そう、思っていたのに。

「ってぇぇぇぇぇ!!」

声の方へ目を向ければ、こちらの姿を捉えるやいなや攻撃を加えてきた6人の小娘。
自分と同じように海の上を進み、こちらへ近づきながら腰や手に持った武装で攻撃を仕掛けてくる。”何者か”。更には小さな飛行機のようなものがこちらへ向かって飛んでくる。

人間ではないだろう。ここは海上だし、この威力の攻撃を人間が繰り出せる筈がない。

…ではあのバケモノどもの仲間だろうか。それにしては見た目が違うようにも感じられる。

その瞬間、頭が割れるように痛んだ。

「ッグッァァァァａａｙａａａａ!!!!!!!」

熱い。まるで頭の中で小人がハンマーを持って暴れているようだ。視界は狭まり鼻の奥から鈍い匂いがツンと刺激してくる。

こちらが動かないのを見て取った小娘たちが更に攻撃を加えてくる。なんとか重い体を引きずるようにして回避。

距離があるためか、まだまともには当たっていない。だが、1発の砲弾が至近に着弾した。

その衝撃と、立ち上がった水柱が、最期の記憶に、重なった。

ドロリ、と意識が塗り潰される。バチン、となにかが切り替わった。

「…イマイマシイ…ガラクタドモメ…！」

「シズメェエエエエエッ!!」

全身から黒い靄のようなものが立ち上り、次の瞬間、身の丈をはるかに上回る異形の怪物へと変貌した。

「ＧＲＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!!!」

自分の激情が怪物にうつったかのように、怪物はおぞましい絶叫をあげ、その丸太のような腕を振り抜いた。

次の瞬間。現れた大砲が一斉に発射され、轟音と震動、そして凄まじい反動が襲ってきた。

歯を食いしばってそれに耐え、砲口から吹き出た爆煙の奥を睨みつける。

「ッ！…ハァッ、ハッ、フッ、フゥウー…」

煙が晴れた向こう側には、今の攻撃が命中したのだろう、ボロボロになった服をまとい膝をつく小娘どもが２人。
残りの４人も無傷ではいられなかったようで、勇ましく攻撃を仕掛けてきていた先ほどまでとはうって変わって全員が戦慄と絶望の眼差しでこちらを見ている。
そのボロボロなありさまを見て、少しだけスカッとしたような、溜飲の下がったような心持ちになった。
割れるような頭の痛みも少しずつ治まった。身を焼き尽くすような激情も、もう胸の奥で燻っているだけだ。
頭のジクジクする痛みを振り払いつつ小娘どもから砲の照準を外す。

「…ツマラヌ…タチサレ……」

「なっ!?ま、待ちなさい…っ」

「待って、高雄さん！祥鳳さんも私も危険域です！これ以上はっ!?」

「今のアタシらじゃあんな化け物には勝てないよ！いったん下がろう!?」

「…くっ。わかりました！長波さんは祥鳳さんのカバーを！朝霜さんは鳥海さんを援護して！」

「了解っ！」

「千代田さん、先頭に！私が殿をつとめますっ！」

こちらを睨み付けつつ、ジリジリ転進し撤退していく小娘ども。

悪くない動きだ。仲間を見捨てることもせず、か。やはりあの時のバケモノどもとは違うようだ。

距離が遠かったから分かりにくかったが、会話もしていたようだし、なにか話しかけてみてもよかっただろうか。

しかし…小娘どもを見た瞬間に襲ってきたあの頭痛は…一体…？

いまだ目の奥に残る鈍痛。生まれて初めての激しい痛みに、少しばかり冷静さを欠いてしまったかもしれない。

そんなことを考えながら少しずつ小さくなっていく6つの人影を眺めていると、やにわにその動きが慌ただしくなった。

なにかのトラブルだろうか…？

そうして意識をそちらへ向けると、第3の目ともいうべき電探が小娘どものさらに向こう側に動く影を察知した。あれは…例のバケモノどもだった。

小娘とバケモノどもはやはり違う存在、それどころか敵対しているようだ。

お互いに戦陣を整えつつジリジリと接近し、ついにその砲が火を吹く。

先ほど自分が撃ったものよりは幾分小さな、しかし腹の底まで響く大砲や機関銃の音が届いてくる。

手負いの2人を庇いながら故か、小娘たちがいくらか劣勢のようにも思える。

このままあの小娘たちが負けてしまい、沈んでしまう。…何故だか、それがひどく不愉快だった。

さっきはいきなり問答無用で攻撃まで受けた。

激情のまま反撃したし、2人は直撃させたはず。

名前も、何処の何者なのかも知らない。

だけど。それでも。

”護りたい”と。”死なせたくない”と…そう、思った。

巨大な砲口を顕現させ、バケモノどもの方に振り向ける。照準。小さく息を吸い込み、撃とうとした、瞬間。

バケモノどもの更に向こう。なにかがキラリと光った、気がした。

—次の瞬間。

バガンッ！という音とともにバケモノどもの1体がその頭を吹き飛ばされて崩れ落ちる。

遅れて小さな、自分達が撃つ砲声より随分と小さな音が聞こえてくる。

キラリと光る度に、1体のバケモノが頭や胸を吹き飛ばされて斃れていく。数瞬遅れて小さな発射音が聞こえてくる。その繰り返し。

気付けば、6体のバケモノはみな急所を吹き飛ばされて海に沈んでいくところだった。

小娘達の攻撃だってそれなりのものだったが、バケモノどもはそれをあまり気にしていなかったように見えた。そんなバケモノどもをただ一撃で葬り去るとは。

―キラリ。

「ッッッ!?」

視界の端で何かが光ったのを視認した瞬間、反射的に首を思い切り横に振った。

理由はない。その生涯のほとんどを戦場で過ごした者の”勘”がそうさせた。

顔のすぐ左を飛んできた何かが通り過ぎる。その勢いは凄まじく、ギリギリで避けたものの左耳が聞こえなくなる。視界が揺れ、たたらを踏む。

ぬるり。と温かいものが左頬を伝う。反射的に手をやると、耳が千切れかかっていた。

ゾワリ。と全身を寒気と恐怖が襲ってくる。

恐れなど、もはやこの身は感じないと思っていた。だがそれは誤りであったようだ。

目を皿のようにして見張りつつ、電探で光った方角を探る。反応なし。いや、そんな筈は。

「ッッ。。…ナメルナァッッッ!!」

砲身展開・全砲門照準・扇射。
辺りに響く凄まじい轟音と海面を大きく凹ませるほどの衝撃。
おそらく撃ってきた奴は移動し始めているだろう、だが構わない。
撃たれた方角、着弾から発射音が聞こえるまでの時間、彼我の位置関係、風向きと風速。
少ない、本当に僅かな情報を拾い上げて”見えない敵を見る”。
敵がいるであろう位置を中心に、最大散布界での一斉射。先ほど小娘どもに食らわせた攻撃が生温く見えるほどの砲撃によって、もはや着弾地点は荒れ狂う火の海と化している。
普通ならどんな生命体であってもその生存は絶望的だろう。
…だというのに。
戦場で鍛え上げた勘が。見えずとも耳が。聞こえずとも鼻が。全身のあらゆる感覚が。
『油断するな』と伝えてくる…!
「やぁ。こんにちは」

「…ッ!?」

馬鹿なッ!?あれだけ警戒していたというのに、背後をとられた、だと!?

「はじめまして。俺は瑠貴亜。今日からこの近くに越してきたモンなんだけどさ、ちょっと挨拶に」

「…アイ、サツ…ダト?」

「ああ。色々試したいことがあってな?ブラブラしてたんだが、お前らを見かけてよう」

あくまでも朗らかに、気さくに話しかけてくる男。

だがその気配には一分の隙もなく、研ぎ澄まされた殺気に、振り返るどころか指一本動かせない。

「さっきの連中は話も通じねぇし、めちゃくちゃに撃ってくるんで沈めちまったけど、お仲間だったか？」

「…イヤ。ワタシニナカマハ、イナイ…」

「そっか。…なぁ、ここであんたは何してんだ？」

「…？ナニモ。シズカナトコロダッタカラ、イタダケ」

「へぇ？」

「ナンダ。ナニガオカシイ」

「いやいや、聞いてた話と違うな、って思ってさ」

すっ、と気配が離れ、殺気も霧散する。途端にドッと汗が吹き出し、膝から崩れ落ちそうになる。

早鐘を打つ自分の心臓の音がうるさく感じる。
必死に平常を取り繕いおそるおそる振り返ると、そこには濃紺の戦闘服に身を包み、片手に刀を持った男が立っていた。
特段大男というわけでもないが、鍛え上げられた身体にはやはり一切の油断も隙も無く、かといって自分を前にして気を張るでもない。
まさに自然体。
―勝てない。たとえ奇襲をかけようと、この男はその全てを撥ね返し、凌駕し、一刀のもとに切り捨てるのだろう。
手にした刀のように”研ぎ澄まされた”印象の男。

「改めて、俺は瑠貴亜だ。…今のところこちらに戦闘継続の意思はない。少しだけ、話をしないか？」

「…ワカッタ」

展開していた全武装を解除する。同時に男も刀を鞘へ納め、鞘ごとベルトから外して右手に持った。

「さて、いくつか教えてほしいことがあるんだが…あー、アンタのことはなんて呼んだらいい？」

「サテナ…ナマエ…アッタキガスルガ、オモイダセナイ」

「そうか…。さっきアンタは”ここが静かだからいる”って言ったよな。この辺にゃずっと住んでんのか？」

「ココニキタノハ…2ネンマエクライ、ダッタトオモウ」

「その前は？」

「モット、ニシノホウニイタ。アチコチサマヨッテ、ココニツイタ」

「ドコモ、センジョウ。…タタカイハ、モウタクサンダ。ダカラ、」

「誰もいないここら辺に住み着いたってワケか。…なら、どうして艦娘を攻撃したんだ？」

「カンムス？」

「ほれ、あそこでこっち見ながら震えてる娘っ子たち」

６人の小娘どもはカンムス、とかいうらしい。全員似たり寄ったりのボロボロさ加減で、中には煤で顔が真っ黒な者もいる。皆抱き合うようにしながらこちらをうかがっている。

「…コッチガシカケタワケジャナイ。ムコウガイキナリウッテキタ」

「なるほどね。こいつぁ失礼した」

「ソレデ…」

「応戦したってわけか。あいつらも運が悪いんだか良いんだか」

「コムスメドモヲミタトキ、アタマガイタクナッタ」

「…ふぅん？」

「”ウタナクテハナラナイ”キガシタノダ」

「…なる、ほどね…」

「…ダガ…」

「うん？」

「…アノバケモノドモトウチアッテイルノヲミテ、”マモリタイ”トモ…オモッタ」

「―へぇ。…じゃああの時構えてたのは、あの子たちを狙ってたんじゃなかったんだな」

「ソウダ」

「そうだったのか。…連中と雰囲気が違うな、とは思ったんだ」

「いきなり撃ってすまなかった。…ところで、アンタはあのバケモノどものことはどれくらい知ってる？」

「アマリ、シラナイ…カイガンデメガサメタトキ、マワリニイタ」

「…マチヲ、オソッテイタ。…キニ、クワナカッタノダ。ダカラ、ハナレタ」

「コウゲキサレルコトモアッタ」

「意思疎通は？なにか喋ったり？」

「イヤ。コトバガツウジルヤツニアッタコトハナイ」

「そうか。……色々訊いてすまなかった。今日のところは帰るよ」

「…ソウカ。……ヒトツ、キキタイ」

「ん、なんだ？」

「アノ…アノバケモノドモハ、イッタイナンナノダ」

「イマノワタシハ、アノバケモノドモトオナジナノカ」

「…すまないが、俺も今日ここにきたばっかりでね。あまり多くを知ってるワケじゃないんだ」

「あの化け物どもは深海棲艦っていうらしい。海に突如現れ、人間相手に戦争吹っかけた」

「目的もなんもわからねぇ。…唯一はっきりしてるのは、殺らなきゃ殺られる、ってことだけだな」

「ソウカ…シンカイセイカン、トイウノカ…」

「…確かにアンタの見た目は深海棲艦に似てる。だが、アンタは…なんか違う感じがする」

「ソウカ？」

「アンタ自身言ってたように、奴らに話が通じたってハナシは聞いたことねぇ。…その時点で、アンタは特別ってことだろ」

「…ソウダロウカ…？」

「まぁ無関係ってワケでもねぇだろうが…だが、あの化け物とアンタを同じ存在だ、って切り捨てるつもりはねぇさ。少なくともこうやって会話ができるんだから、な」

「…カワッタヤツダ…」

目を見れば、目の前の男が本心から話していることがわかる。おかげでこちらは毒気を抜かれてしまった。

男はそのままくるりと振り返ると、震えながらこちらをチラチラ見て固唾を飲んでいる小娘たちへと歩いていった。

「……フッ…オモシロイヤツダ…」

いつぶりだろうか、こんなに晴れやかな気持ちになったのは。思わず笑みがこぼれてしまったのは。

あの真っ赤に染まった海で、周囲の全てが敵だった。人間も、バケモノも。

初めて自分に恐怖を刻みつけた男は、初めて自分に話しかけ、笑いかけてくれた男でもあったのだ。

それがどうしようもなく可笑しくて、こそばゆいような、不思議な面持ちであった。